



杏林

KYORIN DAIGAKU SHIMBUN

大学新聞

- 1 面 硬式野球部
リーグ戦・関東地区選手権 優勝、
明治神宮大会初出場
- 2 面 男子バスケットボール部3部準優勝
杏林祭 2025 行われる
- 3～5 面 産学官連携で奥多摩の地域を元気に！
- 6 面 学部・大学院トピックス
医学部共同研究チームの研究
Nature Communications誌に掲載



東京新大学リーグ・関東地区選手権を制し 悲願の明治神宮大会に出場

杏林大学の硬式野球部は、創部からちょうど40年の今年、ついに念願の明治神宮大会への出場を果たしました。明治神宮大会は大学日本一を決める大学野球の最高峰。今秋、杏林の選手たちは東京新大学野球連盟1部秋季リーグ戦で初優勝、さらに横浜市長杯争奪関東地区大学野球選手権大会でも初優勝し、栄えある神宮のグラウンドに立ちました。その活躍ぶりは学園の教職員・学生・OBなど多くの関係者に感動を与えると共に、全国の大学野球ファンに杏林の存在感を強力にアピールしました。硬式野球部の皆さん、おめでとう。そしてありがとう。今号はその偉業達成の足跡を辿ることから始めます。



第21回関東地区大学野球選手権大会で優勝を決めた瞬間、マウンドに駆け寄る選手たち。これにより杏林大学は初出場となる第56回明治神宮野球大会でシード権を獲得

9勝3敗で秋季リーグ初優勝

杏林大学硬式野球部の躍進が目を見張ったのは10月の東京新大学野球連盟1部秋季リーグ戦です。この大会で杏林は9勝3敗・勝ち点4という堂々たる成績で初めて頂点に立ちました。春季リーグ戦では主力選手のケガで4位と低迷しましたが、秋季リーグ戦は4年生を中心に盤石の布陣で臨み、見事に巻き返しました。就任2年目のシーズンを迎えた溝口智成監督の手腕も光り、部員、OB、学生、大学関係者は歓喜に沸きました。

■表彰選手

- 最高殊勲選手：鈴木悠太選手

- 最優秀投手・最多勝利：松本悠希選手
- 最多打点：長田裕海選手
- ベストナイン（二塁手）：今井玲緒選手
- ベストナイン（外野手）：井土駿太選手
- 新人王：古宇田烈選手（投手）

全試合完封で 関東地区大学 野球選手権も初優勝

杏林大学にとって横浜市長杯争奪関東地区大学野球選手権大会に出場するのは3度目（2014年は1回戦、2024年は2回戦敗退）で、今回は、東京新大学野球連盟優勝校として2回戦（準々決勝）からの出場でした。大会を通して持ち前の粘り強さと一人ひとりが

出塁への闘志を前面に出して挑み、相手投手を何度も交代へと追い込みました。投手陣も力投で応え、全試合を通じて相手に1点も許すことなく、優勝を決めました。

■対戦結果

【準々決勝】杏林大学13-0帝京大学（首都大学野球連盟2位）

【準決勝】杏林大学6-0松本大学（関甲新学生野球連盟2位）

【決勝】杏林大学4-0神奈川大学（神奈川大学野球連盟1位）

■表彰選手

- 最優秀選手賞：長田裕海選手
- 最優秀投手賞：岩井拓巳選手



東京新大学野球連盟1部秋季リーグ戦優勝



横浜市長杯争奪第21回関東地区大学野球選手権大会優勝

明治神宮大会は 延長戦で惜敗

杏林大学は、関東五連盟 第1代表として明治神宮野球大会に挑みました。11月15日、2回戦から出場した杏林大学は、名城大学(北陸・東海三連盟代表)と対戦。6回に先制2点をあげるも追いつかれ、10回タイブレークの末2対3で、明治神宮初勝利は

なりませんでした。

記録づくめのシーズンを 終えて

今秋、部が持つ数々の記録を塗り替えてきた硬式野球部。部長の内藤高雄教授は、「多くの部員、指導者と苦楽を共にしてきた歴史があってこそこの“いま”だと思っています。どんな時も応援し、ご支援くださった皆様に感

謝します」と喜びを語りました。

また、溝口智成監督は、「野球の場面には意味がある。その意味を考えてプレーすることが必要だと言い続けてきました。また、選手とコーチが連携して投・攻・守それぞれテーマを掲げて練習をしてきました。今回、そうしたことが実を結んだのだと思います。来シーズンは主力の4年生が抜けますが、この経験を土台に新たなチームで挑戦します」

と来季への意気込みを語りました。

主将をつとめる4年生の鈴木悠太選手は「技術や心構えなど勝つために何が必要なのかをチーム全体で追究してきました。いまは、4年間、全力でやり切ったすがすがしい気持ちです。神宮初勝利は後輩たちに託します」とチームを神宮に導いた想いを爽やかな表情で語りました。

杏林大学硬式野球部 2025年秋季リーグ戦・関東地区選手権を振り返る

令和7年度 東京新大学野球連盟1部秋季リーグ戦



9月3日、令和7年度東京新大学野球連盟1部秋季リーグ戦開幕。杏林大学の第1カードは9月13、14日の流通経済大学戦。2勝0敗で勝ち点を獲得。



9月27、28日の第3カードで杏林大学は創価大学に2勝0敗。28日は延長11回のサヨナラ勝ち。今シーズンを象徴する粘り強さを見せた試合だった。



10月20日の最終戦まで3校にリーグ優勝の可能性があったが、杏林大学が東京国際大学に2勝1敗で勝利し、通算成績9勝3敗でリーグ戦初優勝。

横浜市長杯争奪 第21回 関東地区大学野球選手権大会



第21回関東地区大学野球選手権大会に東京新大学野球連盟1位校として出場。11月3日の準々決勝で帝京大学(首都大学野球連盟2位)に13-0で勝利。



11月4日の準決勝で松本大学(関甲新学生野球連盟2位)に6-0で勝利。これにより、2位以上が確定し、明治神宮大会への初出場が決定。



決勝は11月5日、神奈川大学(神奈川大学野球連盟1位)に4-0で勝利。第21回関東地区大学野球選手権大会に優勝。明治神宮大会でのシード権を獲得。

PICKUP

男子バスケットボール部

関東大学リーグ3部 準優勝 来季2部昇格めざす



第101回関東大学バスケットボールリーグ戦が8月下旬から11月上旬まで行われました。杏林大学が所属する3部リーグは、12大学による2回戦総当たりで順位を決定します。杏林大学は、17勝5敗でリーグ準優勝となり、2部入れ替え戦の権利を獲得しました。入れ替え戦の対戦相手は2部11位(12校中)の駒澤大学で、試合は11月4日に大田区総合体育館、5日に駒沢オリンピック公園屋内競技場で行われました。

入れ替え戦は、先に2勝したチームが勝ちとなります。創部4年目で、同リーグでは最速の2部昇格の権利を獲得した杏林大学でしたが、駒澤大学に0勝2敗(1日目:杏林 71-93 駒澤、2日目:杏林 75-89 駒澤)で敗れ、2部昇格はなりませんでした。

リーグ戦・入れ替え戦を終えて

男子バスケットボール部 監督 金田 伸夫

先日、約12週間にわたるリーグ戦と入れ替え戦が終わりました。リーグ戦は2位と躍進したのですが、入れ替え戦は強豪駒澤大学に2連敗して2部昇格を果たせませんでした。3部には、慶應義塾大学、國學院大学、玉川大学などの元1部や2部の伝統校が所属しており、そうした大学を相手に健闘したと言えますが、目標であった2部昇格を逃したことは本当に残念です。

私たちは今年やっと4学年揃いました。その若いチームが5部から一気に3部まで駆け上がり、そして2部挑戦という大きな舞台に立ちました。しかし、2部の壁は相当厚く、初めて大きな挫折を味わいました。この挫折を大きな力に変えて、来年こそは2部に昇格したいと思っています。

大会中は多くの大学関係者に応援していただきました。ありがとうございました。

PICKUP

杏林祭 2025

4,000人を超える来場者で大盛況

10月25日、26日に井の頭キャンパスで「杏林祭」が開催されました。雨天にもかかわらず多くの来場者が訪れました。今年のテーマは「∞(Infinity・無限)」。終わりにくなく続く関係性を表しており、杏林祭を通じて学生同士や地域との絆をいつまでも深めたいという願いが込められました。会場では、ぬいぐるみを使った疑似診察体験や筋力測定、中国文化パフォーマンス、ミニ縁日、屋台など多彩な企画が行われ、学生たちと来場者が互いに交流を深めました。

屋外ステージでの吹奏楽やお笑いライブも盛況でした。実行委員長の尾方葵さん(総合政策学部3年)は「雨の中、多くの方に来ていただき感謝しています。来年はさらに充実させたいです」と話しました。



本学参加の産学官連携で 奥多摩の地域を元気に！

本学は2013年度に文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択されたのを契機に、地域交流活動を全学的・体系的に推進し、人々の健康を大きなテーマと位置づけて医療系・文系の各学部が積極的な活動を続けています。その活動は自治体だけでなく、各種団体や民間企業などと緊密に連携して行われ、産学官連携の重要性と有効性を地域社会に示して来ました。こうした中で、本学は今年9月、奥多摩の地域振興を担う企業との間で、持続可能な地域づくりと地域の活性化に資する教育研究の充実を目的とした包括連携協定を締結しました。学生たちはこの企業や奥多摩町などと協力し合い、過疎化が急速に進む地域に飛び込んで実践的な学びの機会を得ながら、そこに住む人々を元気づける活動に力を尽くすことになります。本学が参加した新たな産学官連携の地域活動について詳しくお伝えします。



©Daisuke Takashige

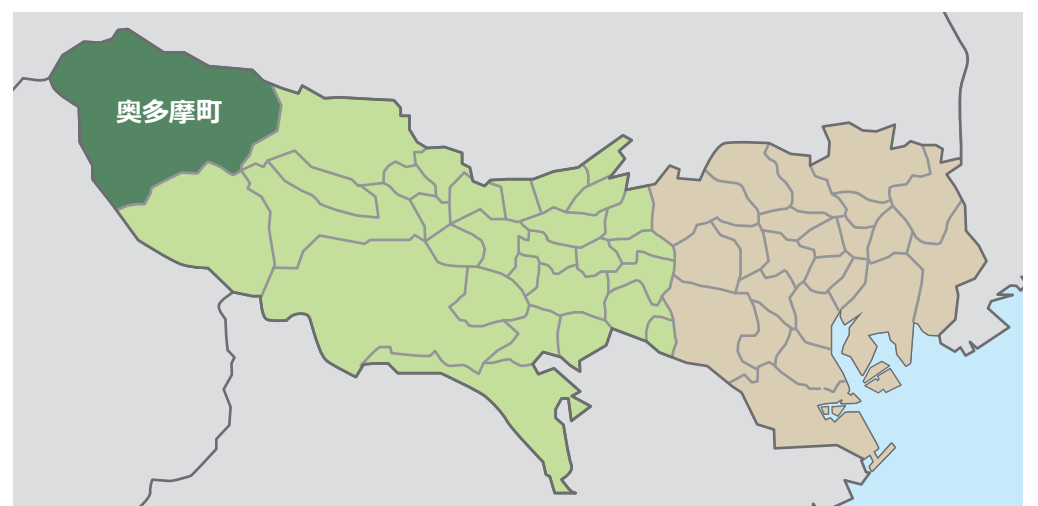
JR青梅線沿線の地域創生プロジェクトが 実践学習の機会に

杏林大学は2025年9月、「沿線まると株式会社」（本社：東京都西多摩郡奥多摩町）と包括連携協定を締結しました。沿線まると（株）は、「JR東日本」と全国各地で地域の活性化やビジネス創生を支援している「株式会社さとゆめ」が共同出資して設立された会社で、鉄道沿線の宿泊事業など地域創生の活動を展開しています。協定式には、本学の渡邊卓学長と沿線まると（株）の田治米伸康取締役のほか、JR東日本八王子支社、奥多摩町役場の関係者も出席しました。

包括連携協定書では、「沿線まると（株）と杏林大学は相互の協力により持続可能な地域社会づくりと発展、活性化の推進に貢献する教育・研究活動の充実、ならびに人材育成を目的とした協力関係を構築する」として、以下のような連携内容を規定しています。

- ・相互の知的、人的資源等を活用した産業振興に関すること
- ・地域経済の活性化に係る教育プログラムに関すること
- ・学生の実践的な学習機会の創出に関すること
- ・産学連携による新たな価値創造に関すること

観光振興などを伴う地域経済の活性化は、地元住民の生活向上や鉄道経営の改善に繋がると共に、大学としても、学生が地域社会の課題に向き合い、解決策を探るという実務的な学習の機会を得ることができます。沿線まると（株）が2021年に設立された後、最初に手掛けたプロジェクトが過疎に悩む奥多摩エリアの「JR青梅線沿線活性化事業」で、杏林大学は総合政策学部、外国語学部のゼミナール活動を通してこの事業に参加することになりました。



奥多摩町（おくたままち）：東京都の多摩地域北西部に位置する町で多摩地域に3つある町のひとつ。人造湖・奥多摩湖の下流域に集落が広がる。東京都の自治体では最大の面積（225.53km²）で、町域の94%が山林。町は秩父多摩甲斐国立公園内にある。65歳以上が人口比の50%以上を占め、人口減少、少子高齢化が大きな社会問題となっている。



沿線まると（株）は、青梅駅から奥多摩駅の間で事業を展開。学生たちは鳩ノ巣駅や奥多摩駅周辺で活動。



地域創生に期待された“学生の行動力”

杏林大学と沿線まるごと(株)が出会うきっかけは、学生たちの活動からでした。2年前、井の頭キャンパスで国内各地の特産品を集めて販売するイベント「クラフトマーケット」を開いたときに、奥多摩産のワサビが出店されました。意外な特産品に興味を持った学生たちは奥多摩を盛り上げる活動をしている人たちの会合に参加します。そのとき沿線まるごと(株)の関係者と出合って意気投合。その後、学生たちはJR青梅線の鳩ノ巣駅付

近の整備事業に協力して、社員や住民たちと一緒に草取りをしたり、会社が企画した観光スポットを巡るツアーに参加したりしました。学生たちはこうした活動を通して発見した地域課題とその解決策について、学生目線で作成した報告を会社に行ったりもしました。

一方、沿線まるごと(株)は、2025年3月に行われた杏林大学地域総合研究所フォーラムで奥多摩地域での地域創生活動について講演等を行ったほか、2025年秋に社会人向

けに開講した「杏林大学 まなび直し講座・杏林型ウェルネスツーリズム」で2コマの講義を担当することに。こうした本学と会社の交流が連携協定に発展したのです。

沿線まるごと(株)は鉄道と地域資源を融合させた新たな観光モデルを展開しており、将来的には全国30路線への拡大を目指しています。奥多摩地域では「沿線まるごとホテル」というコンセプトのもと、無人駅をフロントにし、古民家などの空き家を客室にしたユニークなホテル事業に乗り出しました。2025年5月にホテルの第一棟が開業。地域

住民を「ホテルキャスト(宿泊客が快適に過ごせるようなサービスを行う人)」として、町全体でおもてなしを提供しています。

杏林大学はこうした事業に関連する地域おこしに参加することになっていて、協定の締結後に早速「奥多摩町町制70周年事業」に携わりました。11月16日に行われた記念イベントでは、企画・運営に総合政策学部の三浦ゼミと外国語学部の古本ゼミの学生約50人が参加しました。町の関係者からは、「若い人の視点で、いろいろな提案をしてもらい、イベントに活気が感じられた」と好評でした。

■ 杏林大学・沿線まるごと株式会社 これまでの交流

2025年 3月 地域総合研究所フォーラム【写真①】

「企業×自治体×総合大学の連携で織りなす『杏林型ウェルネスツーリズム』の発展と意義」をテーマにしたフォーラムが井の頭キャンパスで開かれた。(株)さとゆめ・沿線まるごと(株)・JR東日本(株)・奥多摩町観光産業課の職員による講演、パネルディスカッションを通して産学官が連携した地域づくりについて考えた。

2025年 7月 学生が奥多摩地域の課題を報告【写真②】

奥多摩地域の課題報告会で、三浦ゼミと古本ゼミが、現地調査などを行った結果導き出した地域課題を発表。

2025年 9月 杏林大学と沿線まるごと(株) 包括連携協定を締結【写真③】

奥多摩町の持続可能な地域社会づくりと地域の発展・活性化の推進に貢献する教育・研究活動の充実、ならびに人材育成を目的とした協力関係を構築するべく、包括連携協定を締結。

2025年11月 奥多摩町町制施行70周年記念事業

三浦ゼミと古本ゼミが企画・運営に協力。



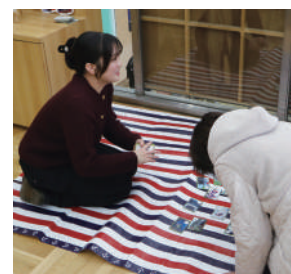
奥多摩町町制施行70周年イベント



奥多摩駅前に地元の食材を使った人気店が出店



奥多摩ビジターセンターでは、奥多摩産の材木で作ったピンを倒して遊ぶ「モルック」や学生が作った「奥多摩かるた」遊びが行われた



学生のアイデアによる「おくたま70周年特別展示」。見学者に説明をする学生



総合政策学部

わたなべ まなぶ

渡辺 学さん(三浦ゼミ4年生)

2年前のクラフトマーケットに出店した奥多摩の事業者を通じて、奥多摩の魅力を知り、奥多摩を盛り上げる活動に参加した一人で、今回のイベントの学生代表を務めた総合政策学部4年生の渡辺学さんは、「多くの方に奥多摩を知ってもらうため、町民20人

インタビューのパネル展示や町の見どころをめぐるスタンプラリーを行いました。当日は天気に恵まれ、多くの方が楽しんでくれました」と話しました。

また、イベントを振り返り、「奥多摩の方は、“町と自然の調和を大切にしたい”強い思いがあり、それを重視して活動したいと感じました。多方面でサポートしてくれた、沿線まるごと(株)の溝口さんは、学生の自由な発想が町の活性化のヒントになると、私たちの意見を真剣に聞いてくれ、何事にも、実際に現地に行って、人と話すことが大切だと、自らの行動を通して私たちに教えてくれました。ここで得た経験は、私にとってかけがえのない財産です。奥多摩の皆様、関係者の皆様に感謝しています」と話しています。



一般財団法人 おくたま地域振興財団

かん しゅんいちろう

菅 俊一郎さん

奥多摩町の豊かな自然を活用して森林セラピーや観光PRなどの事業を展開する、おくたま地域振興財団の菅俊一郎さんは、「70周年イベントを通じて、学生が奥多摩の歴史や文化などに興味を持ち、なにか魅力を感じてくれたら嬉しいです。イベントでは、『町民

20人インタビュー』の一人として学生の取材を受けました。私の話を熱心に聞き、質問をたくさんしてくれたことが嬉しかったですね」と学生との交流について聞かせてくれました。

学生が地域で活動することについては、「全国には、奥多摩と同じような課題や問題を抱える地域も多く、学生がそうしたことに関心を持ってくれたのは嬉しいです。遊びたい盛りにもかかわらず、奥多摩の人と深く関わり、時間をかけてイベントの準備をしてくれました。この経験は社会に出て間違いなく役に立つでしょう。なにより、奥多摩町に注目し、地域と一緒に盛り上げてくれたことに感謝しています」と話しています。

インタビュー①

学生とつくる奥多摩のミライ

沿線まると株式会社 コーディネーター 溝口 謙太 氏



◆溝口謙太（みぞぐち・けんた）氏
鉄道と地域をつなぐ「沿線まるとホテル」の構想を現場の最前線で形にしている。JR東日本から出向中

—奥多摩町の地域的な特徴について教えてください

奥多摩町は東京都でありながら、人口減少や高齢化、空き家問題など地方特有の課題を抱えています。都心からのアクセスが良く、自然や文化が色濃く残る奥多摩は、地方創生を学ぶ場として理想的です。

—この取り組みで大切にしていることは何ですか

住民の皆さんとは、継続的な関係を築くことを重視しています。〇〇商店の〇〇さん、ワサビ田の〇〇さん、など顔の見える関係を

大切にしています。学生にも「住民とどんだん話をしてほしい」と伝えています。

—地域で活動する学生の様子はどのような様子ですか？

奥多摩町のイベントに向けて、積極的に住民インタビューをしていました。杏林の学生は、どんな時も主体的で積極的な姿勢で臨んでいて、地域の方々にも好意的に受け止められています。

—学生にとっての意義はどのような点にありますか？

現場での学びは、学生にとって貴重な機会です。実体験を通じて、地域課題に対する理解を深めることは、これからの社会を生きる若い人にとって大きな財産になります。

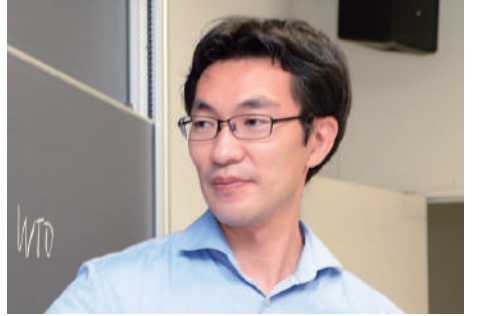
—今後の活動について教えてください

沿線まるとホテルは、単なる宿泊施設ではなく、地域の未来を共に創るプラットフォームです。学生、住民、行政と連携して、奥多摩の魅力を再発見し、持続可能なまちづくりを目指す活動をしていきたいです。

インタビュー②

奥多摩で育まれる「実践の学び」

地域連携センター 副センター長・総合政策学部 三浦 秀之 教授



◆三浦秀之（みうら・ひでゆき）教授
国際政治経済を専門とし、グローバルな課題の発見とその解決を志向するゼミを展開。東日本大震災の被災地での課題発見と解決に取り組んだプロジェクトは、2015年と2018年にグッドデザイン賞を受賞

—奥多摩での学生の活動をどのように考えていますか

奥多摩は、過疎化や少子高齢化に伴い、多様で複雑な課題を抱えていて、その解決に向けた道筋は、模索の途上にあると思われます。だからこそ、学生が地域に足を運び、現場に触れることは、課題を発見し、解決への一歩を踏み出すうえで重要だと考えています。

—奥多摩での取り組みについて教えてください

沿線まると(株)の協力のもと、外国語学部の古本ゼミナールと連携し、奥多摩地域の課題発見に取り組んでいます。学生は、町の基本計画や各種データ、地域の歴史を丁寧に調査したうえで仮説を構築し、その検証のために地域へ赴き、ヒアリング調査を重ねてきました。社会の多様な課題を、現場での体験と仮説検証を通じて理解を深めています。

—学生の成長をどう感じていますか？

普段関わる機会の少ない企業や行政、地域の大人から学ぶことは多く、その過程でスケジュール管理やタスク遂行力、責任感を身

につけているようです。また、実践の中で気づいた自らの知識不足を補うために大学の授業で主体的に学ぼうとする、良い学習循環も生まれています。奥多摩での取り組みは、総合政策学部が掲げる理念「社会の課題を多角的に捉え、自らの行動できる人材の育成」を体現するものだと感じています。

—今後の展望を教えてください

学生自身が見いだした地域課題の解決策を発表する場を設ける予定です。その解決策が小さなものであっても、実際に形にするためのスモールステップを踏み出し、次の挑戦につなげていくことが重要だと考えています。

産学との連携で町おこしがグレードアップ！ 奥多摩町 町長 師岡 伸公 氏



奥多摩町は1957年に奥多摩湖ができてから、これを核にした観光振興に力を入れていますが、今の時代はそのあり方が様変わりしています。産業界や大学の皆さんは行政機関がなかなかできないことをやってくれる面があり、ここ数年の産学のご協力で町おこしがグレードアップして来た印象があります。沿線まると(株)は、青梅以西の地域で町の

ホテル化という新たな企画を考案してくれ、それが今この地域の観光振興の大きな流れになっています。こうした事業者とのコラボレーションは行政だけでなく、学生にとっても実践を学ぶよい機会になると思います。

今年、杏林大学の学生さんたちにはワサビ田での活動や町制70周年の記念事業に参加してもらいましたが、町の関係者からは



「非常によくやってくれ、自分も頑張ろうという気持ちになった」という声を耳にしました。大変感謝しています。

杏林大学では、各地で自治体や企業などと連携して学生たちが多様・多彩な取り組みをしています。その一部を紹介します。（2022年～2025年の実績）

中部地方

観光プラン提案
(長野県観光機構)観光ツアー提言
(静岡県東伊豆町)地域コミュニティに関する提言
(愛知県豊橋市)観光モデルコースを企画
(愛知県田原市)まちづくり提案
(新潟県三条市)

▲観光を学ぶ外国語学部の学生が長野県観光機構と連携して「杏林型ウェルネスツーリズムプラン」を発表。保健学部の学生と共にそのプランを実体験した。

九州・沖縄地方

骨密度測定プロジェクトの実施
(鹿児島県喜界島)まちおこしプラン提案
(佐賀県上峰町)

▲2023年度から疫学研究の一環として島民の骨密度測定を継続的に実施。希望者には健康アドバイスもしている。

東北地方

地域イベントのサポート
(秋田県湯沢市)観光振興意見交換
(秋田県湯沢市)地域医療体験
(福島県いわき市)

▲2010年から行っている秋田県湯沢市・秋ノ宮温泉郷で開催される「かだる雪まつり」の会場設営。地元の人と協働でミニかまくらを作りイベントを盛り上げた。

地域産業に関する調査
(宮城県石巻市)へき地医療体験見学
(福島県南会津町)

関東地方

救急救命講習会
(東京都羽村市)いのちの大切さを子どもに伝える活動
(東京都三鷹市)防災・まちづくり活動
(東京都三鷹市)健康寿命に関する提言
(大学コンソーシアム八王子)健康プログラム提供
(東京都武蔵野市)

▲2010年から実施している羽村市の中学校での救急救命講習会。AEDや心肺蘇生訓練用人形を使用し、一次救命処置の講習会を行っている。

観光まちづくりカレンダー制作
(東京都小平市)地域での就労をサポート
(社会福祉法人むつづ)高齢者健康イベント開催
(東京都三鷹市)年末年始のいけがな展示
(株式会社アトレ)



TOPICS

総合政策学部 米国東部のクツタウン大学で海外研修



8月28日から9月11日まで、総合政策学部の1、2年生8人が米国ペンシルベニア州のクツタウン大学(KU)で研修に参加しました。

この大学は総合政策学部のミシェル・ジョエル講師の母校で、2024年から毎年互いの学生が訪問し合う形で交流を続けています。

研修では、5月に杏林大学を訪れたKUの学生と一緒に授業を受けたり、ホストファミリーとの交流や観光を楽しんだりしました。

参加学生からは「積極的に授業に取り組むKUの学生の姿勢に刺激を受け、『自分ももっと頑張ろう』と思いました」「文化や言葉の違いを肌で感じる事ができて貴重な体験でした」「最初はうまく喋れず悩んでばかりでしたが、ホストマザーが親身に相談に乗ってくれ、打ち解けることができました。帰国する時にもらったノートには温かいメッセージが綴られていて胸がいっぱいになりました」と話しました。

外国語学部 パラリンピアンを講師にユニバーサルツーリズムを学ぶ



外国語学部観光交流文化学科では、高齢者や障害者が安心して旅行を楽しむための環境づくりを学ぶ「福祉観光論」の授業を

行っています。授業では、元パラリンピックの陸上選手や車いすで世界一周した方を講師に招き、バリアフリーやユニバーサルデザイン、ユニバーサルツーリズムの現状や課題について学んでいます。学生たちは、体験に基づいた貴重な話を聞き、教科書では得られない実践的な知識を身に付けています。また、授業では教室から出てキャンパス内を車いすや白杖を使って移動する実習も行われ、学生たちはサポートする側・される側それぞれの立場を実体験しています。学生の一人は「実習などを通じ、バリアフリーとは物理的なサポートだけでなく、優しさや気配りが大切であること、助けるより、「寄り添う」ことが大切であることを知りました」と話しています。

保健学部 3専攻合同でリハビリのチーム医療を学習



保健学部リハビリテーション学科では、理学療法学専攻・作業療法学専攻・言語聴覚療法学専攻の学生と一緒に学ぶ「3専攻合同プログラム」を学科設立当初から実施しています。1年生を対象としたこのプログラムは、将来、チーム医療に携わる学生に多職種連携の大切さを早くから知ってもらうことを目的としています。今年度は「リハビリテーション職種の役割」をテーマに、まず前半では付属病院リハビリテーション室で働く現職の療法士を含めた3人が講師となり、それぞ

れの役割やチーム医療の進め方について、現場の様子や自らの経験を交えて講義を行いました。後半では、3専攻の学生混合のグループを編成した上で、模擬症例を通じてディスカッションを行いました。ディスカッションは、理学療法、作業療法、言語聴覚療法それぞれの立場に加えて、家族の立場からといった様々な視点に立つ形で話し合いました。プログラムを担当する松村将司講師は、「3専攻がそろったことで、学生は他のリハビリテーション関連職種をより身近に意識しながら学ぶことができるようになりました。本プログラムでは、現職の療法士の協力のもと、1年次から将来の専門職としての役割を具体的に学ぶ機会を提供しています。今後も3専攻の連携をさらに深め、リハビリテーション学科の特色を活かした教育を展開していきたいです」と話しています。

医学部 徳島の病院で学んだ医師のあるべき姿



今年の10月、医学部4年生の岡田直樹さんと阿部尚樹さんは、医学教育学教室の自由参加プログラム(学生が各教室の研究活動に参加できるプログラム)として徳島県三好市の徳島県立三好病院で、3泊4日の病院体験を行いました。病院体験では、救急科、循環

器内科、緩和ケア病棟など幅広く診療現場を見学したほか、へき地医療の実際を知るため診療所にも足を運び、患者に接する医師の対応ぶりを間近で観察しました。また、二人は院外で地域の人々と交流する機会を得て、お年寄りとのコミュニケーションについても多くを学びました。実習を通して、岡田さんは「医学の知識の使い方だけでなく、患者さんや地域に寄り添う医療者のあり方を学べました」、阿部さんは「地域では専門にとらわれず、「何とかしてくれる医師」が期待されていることを実感しました」と感想を語りました。病院体験は、座学では得られない、地域医療や医師のあるべき姿を心に描く貴重な学びの場となりました。

杏林大学医学部共同研究チームによる研究が 英国科学誌「Nature Communications」に掲載

消化器内科学教室、産科婦人科学教室、小児科学教室、総合医療学教室からなる研究グループが、「日本人妊婦では妊娠早期にラクトバチルス属の乳酸菌を膣内に多く持つ場合、妊娠経過が良好である」という研究成果を発表し、英国科学誌「Nature Communications」に掲載されました。

ヒトの身体には多種多様な微生物の集まり(微生物叢:マイクロバイオーーム)が存在し、妊娠中の母体のマイクロバイオーームは、母親の健康や胎児・新生児の発育に影響を及ぼすと考えられています。しかし、どのようなマイクロバイオーームが妊娠・周産期の「健康な状態」に関係しているのかは、解明されていませんでした。これが明らかになれば、新たな病気の予防や治療に役立つ可能性があると考えられ、本研究が進められました。

消化器内科学教室の久松理一教授は「今回の研究で、母親の膣内細菌叢は人種によって違うこと、膣内細菌叢のラクトバチルス属の割合が妊娠期間に影響することが明らかに



◀後列左から
成田雅美教授(小児科)
久松理一教授(消化器内科)
三好潤准教授(消化器内科)
花輪智子教授(総合医療学)
谷垣伸治教授(産科婦人科)
木村俊彦助教(小児科)
小栗典明助教(消化器内科)
小林千絵助教(産科婦人科)

になりました。さらに研究を進め、新生児の腸内細菌叢決定のメカニズムや将来の疾病発症への影響という重要な課題の解明につながることが期待されます」と述べています。

さらに久松教授は、「本研究は杏林大学医学部の共同研究プロジェクトから始まり、筆頭著者の小栗医師は本学の卒業生です。いわば100%杏林オリジナルです。杏林大学が世界レベルで競える研究を遂行するポテンシャルを持っていることが証明されました。ぜひ若い先生方、学生さんも誇りと自信を持って活躍してほしいと思います」とコメントしました。

編集を終えて

今号では、八王子キャンパスで活動している強化指定団体の、めざましい活躍を取り上げました。大学スポーツの躍進は、関係者にとどまらず、在学生、OB・OGなど多様な方々に本学を意識してもらう絶好の機会となります。同じように、産学官連携による教育展開もそれに携わる学生の成長が大事ですが、その成果は本学の社会におけるプレゼンスを高めることに繋がります。今後もさまざまな場で学生が輝くことを期待しています。(編集長)

杏林大学新聞 編集長 古本泰之(学生支援センター長) / 広報室
TEL.0422-44-0611 E-mail koho@ks.kyorin-u.ac.jp URL <https://www.kyorin-u.ac.jp/>

私にとっての秋は、例年は「食欲の秋」。秋刀魚や松茸を肴にひやおろしを嗜む、デザートに大好きなモンブランをいただくなどして秋の夜長を過ごしていましたが、今年は10月に罹患したコロナの影響からか味覚障害が起り楽しめませんでした。代わりに今年は今号でも大きく取り上げた、硬式野球部や男子バスケットボール部の熱戦を観戦し、大声で応援する「スポーツの秋」(観戦ですが...)で盛り上がりました。(広報室長)

読者の感想をお聞かせください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。▶



キャンパスの日常やイベントなどを
配信していますぜひご覧ください!
@kyorin_university

